

生死の境を越えて

平成12年8月8日、我が家に待ち望んでいた娘、まみが誕生しました。

赤ちゃん誕生後、母の胸に抱えられるシーン…でも、うちの場合は少し様子が違っていました。

産声を上げることがなく、母の元からバタバタと連れていかれました。気がつけば、NICUで人工呼吸器をつけられ、保育器の中で力なく寝ていました。

そして母との面会…生死の境を越えて、私達両親のもとへ生きて還って来てくれました。

父には医師から「覚悟するように」と言い渡されていたことを、後になって聞かされました。

「抱きしめ、受け入れる」

赤ちゃんの顔を見たとき、自らダウン症だと分かりました。出産直前に偶然見たドキュメンタリー番組で、ダウン症の子供の特集をしていました。これもお告げだったのかな？とその時に感じました。

妊娠中も高齢出産のため、医師から羊水検査も聞かれましたが「どうであれ、私は産みます」と断言しました。

しかし、目の前の現実を見たとき「受け入れなければ！」でも…「間違いであって欲しい！」と心が揺れ動いていました。

退院までの1週間、気持ちを書きとめ、その現実を少しずつ受け入れられるようになっていったことを思い出します。

まみの退院までの1カ月半、毎日病院に行き、朝から晩まで共に過ごしました。毎日まみを抱きしめ続けました。

そして、看護師さんたちにも支えられ、娘を愛おしいと思える母になれました。

そして何よりも、すべてを受け入れて「二人で育てて行こう」と言ってくれた優しいパパがいてくれたからこそ家族仲良く過ごせているのだと、いつも感謝しています。

「こころ豊かに」

3才3カ月でやっと歩き始めました。それまでは、いつになったら歩けるのだろうと、気の遠くなる思いで過ごしていました。

比べても仕方がないのに、同じダウン症の子供たちと比べては一人で焦っていました。

その時も沢山の方に出会い、支えられ、「いつかは歩けるようになるのだから、ふたりでゆったり過ごせる時に、楽しく心を育てなさい」と教えて頂きました。

それからは「心豊かに育てる」という事をいつも考えながらまみに接しようと、気持ちを切り替えることができました。

「夢を追って」

小さい頃は何をする時も、様子を見てから、自分でも大丈夫と思うものしか手を出さない、どちらかと言うとけん制型の娘でしたが、今では親が頭を抱え込むほど、何事にも手を挙げる積極的な人になってきました。

現在は小学校5年生。学校でも沢山の役割を与えられます。そんな委員を率先して立候補し、獲得しています。

集団登校の副班長で(人数が少ない学校なので)、班長がお休みの時は自信满满でみんなを率いて登校しています。危なっかしいのですが、母は後ろから冷や汗をかきながら見守っています。

親としては、できるだけ健常児と変わりなく成長して欲しいと思っています。しかしながら、現実には年を重ねるにつれ、知的な部分は明らかに開きがついてくるのも事実です。

今は、本人の力を信じて出来る限りのサポートをして、知的な部分は基より十分に心を育て、社会性を養ってあげたいと思います。人としての常識・ルール・思いやり・感謝・痛みのわかるやさしい心が育っていってくれればと思います。

決して勉強を投げてのではなく、ゆっくりでも本人の理解を深めることと、しっかりと習得することが、一番大事だと思っています。いくら数唱ができたとしても、数の理解がなされないと意味がないのです。大好きな勉強を好きなまま大きくなってもらいたいです。

甘やかすのではなく、無理やりにでもなく、まみの成長に応じた対応で、当たり前前に出来るべきこときちんと理解できること、それらを必要に応じて教えていきたいと考えています。